



令和に望むこと 苦難の深刻化に備えよ

いおきへ まこと
五百旗頭 真
(アジア調査会長)

新元号が「令和」と決まった。1。明治・大正・昭和・平成の元号は、どれも字義が明瞭な漢語の2字から成り、新時代に期待するイメージがはつきりしている。それに対して「レイワ」と言われて、私は2度聞き直し、さらに漢字でどう書くのか問うた。新しい造語である。

令息・令嬢・令夫人という。「立派な」「よい」という意が令にはある。情を込めてなれなれしく肯定するのではなく、一歩離れて敬意を持って発する言葉である。折り目正しくご令室様と言う。そのような意味合いで、令和は「よき和」である。

漢籍ではなく、和書の万葉集が出典である。であれば、字義概念であるよりも情景や情感が重要である。梅の花をめぐる宴が舞台であり、清澄な寒さの中で春近しを願う思いが漂う。やみくもに平和でなく、冷涼なきりりとした筋の通る平和を言いたいのであろうか。

他方、生類憐れみの令、政令、威令を天下に、など令には権力発動の意味がある。それに従えば、令和は国家統治の行き届いた平和である。外国メディアの報道には、この解釈が多いようだ。もし出典が古事記や日本書紀であれば、そのニュアンスが強まったであろう。しかし万葉集という



人々が見守る中、菅義偉官房長官が新元号「令和」を発表する様子が街頭の大型ビジョンに映し出された＝東京都新宿区で4月1日、竹内紀臣撮影

人々の文化的営みを出典としたことによって、梅の花をめでる円居(まどい)の情景が浮かび上がることになった。繰り返すが、和書は明確な字義概念であるよりも、円居とある。日本国民は権力支配による平和よりも、円居と協和によるさわやかな平和を、令和の時代に望むに違いない。

元号への願い、歴史の歩みは別

令和への願いがそうであるとして、歴史の歩みがそのような保証はない。元号には来たるべき時代への希望が託されるが、その通りになる例はむしろまれである。2。現に平成の時代がそうならなかった。

平成の元号には、平和のうちのことを成就する願いが示された。しかし現実の平成30年は、「平」でも「成」でもなかった。むしろ三重苦にさいなまれた時代であった。第一は、ご自慢の経済がバブルがはじけて低迷したことである。第二は、1995年の阪神・淡路大震災以来、日本列島は地震活動期に入り、2011年の東日本大震災という最大級の地震津波が襲来した。加えて地球温暖化に伴う集中豪雨が毎年のように各地を襲った。平成は大災害に苦しむ時代となった。

第三に、冷戦終結後の世界的動乱である。動乱をもたらした主な勢力を挙げるなら、自爆テロをほしのままにしたイスラム過激派、核とミサイルを振りかざす北朝鮮、超大国化に突進する中国である。3者のうち二つまでが、日本周辺であり、戦後日本を初めてリアルな脅威にさらした。

その名に反して、三重苦に責められた平成時代の日本である。ただ、欧米でポピュリズムや強権政治の増長がやまない中、日本社会は厳しい試練の中でも乱れ立たず、平静



五百旗頭 真 (いおきべ・まこと)

1943年生まれ。京都大大学院修了。法学博士。専攻は日本政治外交史。米ハーバード大客員研究員、神戸大教授、防衛大学校長、熊本県立大理事長を経て、昨春から兵庫県立大理事長。この間、東日本大震災に伴う政府の復興構想会議議長などを歴任。アジア・太平洋賞選考委員長。

を失わずにいる。内外とも人にやさしい生き方を見失ってはいない。なぜだろうか。一つには、欧米のような移民の津波を日本は今のところ免ぜられている。もう一つは、平成に入って経済低迷の中でも、国民皆保険や生活保護など社会福祉制度が比較的整っているのが日本の救いである。成熟社会の安全と文化的魅力が外国人観光客の波を引き寄せている。山崎正和氏はある研究会で平成の姿を「文化的充実の定常型社会・鎖国なき江戸時代」と評した。三重苦の中の奇妙な平穏と安定という平成の構図は、令和時代に引き継がれるのであろうか。苦難のいくつかは持続し、深刻化の危険すらあ

り得る。

まだ終わらない大災害の時代

大災害の時代はまだ終わらない。16年の熊本地震はおそらく地震活動期の後半部の開始を意味し、全国各地に地震や火山噴火を起こしつつ、南海トラフの大地震津波に行き着くことが憂慮される。全国各地の地震のうちに、首都、大阪、京都の大都市が含まれないことを祈りたい。断層の存在が知られるこの3都市では、阪神・淡路大震災の比ではない地獄絵図を招きかねないからである。日本社会は災害からの復旧・復興を歴史的に得意としており、とりわけ阪神・淡路大震災以降、多くの震災から学習して対処能力を高めてきた。しかし令和の時代に起こり得る、さらに大きな災害に日本政府と社会が備え得るか否かが問われている。

◇平成の宿題に向き合え

平成に代わる新しい元号が令和に決まった。憲政史上、天皇の退位に伴う初の改元となる。元号は従来、中国の古典が典拠だったが、日本最古の和歌集、万葉集が初めて典拠となった。平成には「国の内外にも天地にも平和が達成される」という意味が込められていた。だが実際には、日本と世界は、冷戦終結やバブル経済の崩壊、相次ぐ災害と大きな変化に見舞われた。令和の時代、平成の宿題に日本はどう向き合うのか。

る。

動乱の世界を見れば、イスラム過激派は凋落ちようらくに向かい、北朝鮮は平昌オリンピックを機に転進を求め、中国も軌道修正を試みている。秩序への挑戦勢力は揺らいだが、逆に秩序の担い手であった欧米が自壊状態に陥っている。米中対立の前線にある日本が大きな危機と機会に直面していることを知るべきである。

これらに加え、令和の時代には、人口減少と過度な一極集中にも取り組まなければならないであろう。日本の対応次第で、地獄にもなれば立派な平和にもなり得る令和なのである。

■ことは

◇1 「令和」の政府説明

安倍晋三首相は新元号「令和」の決定に際し「悠久の歴史と薫り高き文化、四季折々の美しい自然、こうした日本の国柄をしっかりと次の時代へと引き継いでいく。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ、見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる日本でありたいとの願いを込めた」などと語った。

◇2 元号と歴史の歩み

明治の日本は、欧米のアジア支配に対抗して近代化を推し進めた。日清・日露戦争に勝利し、不平等条約の改正を果たした。大正時代には、帝国主義国家として欧米に肩を並べた。デモクラシーと第一次世界大戦、ロシア革命の影響に彩られる。昭和は、先の大戦を挟み、戦前と戦後に分かれる。戦前の日本は、満州事変、日中戦争を経て第二次世界大戦に突入し、連合国に降伏した。戦後は、新憲法が制定され、主権を回復。64年まで続く長い時代となった。